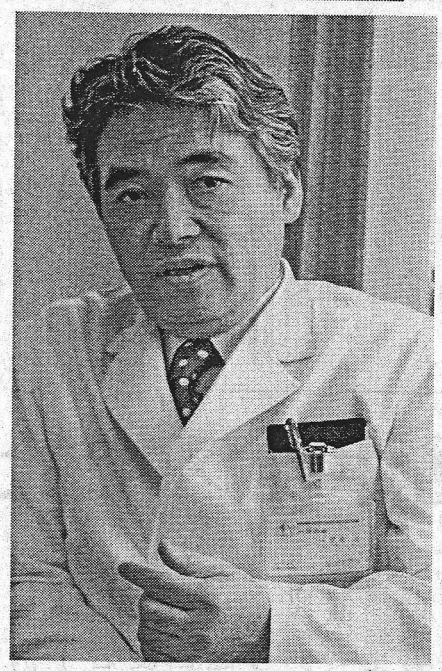
山陽新聞 '07.7.5

# AMDA 菅波茂代表に聞く

## 岡山大クワイ河医学踏査隊から35年

岡山大医学部の医師や学生がタイ、インドなどを巡った国際貢献活動の第１次クワイ河医学踏査隊から35年。その活動は、国際医療ボランティアＡＭＤＡ（本部・岡山市楢津、菅波茂代表）の発足につながった。踏査隊に参加し、国際貢献活動の先頭に立つ菅波代表に、ＡＭＤＡの現状と今後を聞いた。（斎藤章一朗）＝５面関連



# 国際貢献の夢 現実化

## 今では29ヵ国に支部

Q&A

―菅波代表は、クワイ河医学踏査隊を機にアジアの医学調査などを続け、一九七九年にはカンボジア難民支援に向かった。しかし、十分な活動ができず、情報と受け皿がないと何もできないことを知ったと聞く。経験をどう生かしているのか。

海外の医学生との交流により、八四年のＡＭＤＡ設立へとつながった。今では二十九カ国に支部を持つまでに成長した。

当時、夢に描いていたことが、一つ一つ現実になっている。緊急救援活動はもちろん、国際ネットワークの確立、多国籍医師団や大学との提携など、考えていたことが実現している。

―特に印象に残る活動は。

二〇〇四年末のスマトラ沖地震。被害のあったインド、スリランカ、インドネシアの三カ国で、ＡＭＤＡ支部十カ国から約百人の医師らが救援活動を行い、これまでで最大規模の活動となった。

また昨年、国連認定の協議資格で、委員会などで政策提言ができる「総合」を取得したことも印象深い。ＡＭＤＡの活動が国際社会で評価され、存在意義が認められたということだ。「西のジュネーブ、東の岡山」とのスローガンを掲げるＡＭＤＡが、ローカルＮＧＯ（非政府組織）を結びつけるための資格、役割を得たことになる。

―行政や民間の支援も重要だったのでは。

全国に先駆けて県が国際貢献条例を制定した。宗派を超えた組織・人道援助宗教ＮＧＯネットワークの支援や岡山大、大阪大大学院、海外の大学などとの提携もある。さらに、各国医師会との連携や協定締結など態勢が少しずつ整ってきた。何と言っても県民の理解を得ることが、活動をする上で大きい。

―今後の活動の展開は。

ネパールに医科大学をつくることを考えている。貧しさのため医師になれない人を海外から集め、医師として各国に帰って貢献してほしい。緊急救援に参加する人材の育成につながるだろう。

ＡＭＤＡが掲げる相互扶助をテーマにした政策コンペティションも行いたい。世界のＮＧＯから政策を募り、岡山で審査し賞を贈る。ＮＧＯとのネットワーク拡大にもつながると思う。